

2006年5月入職

たけばやししほ
竹林志保

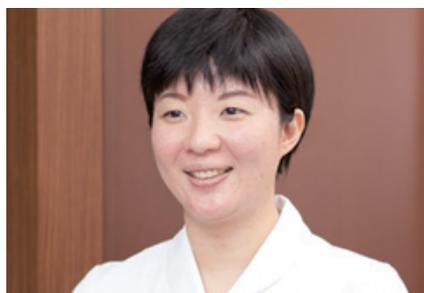


自分なりの信念を、発信し続けたい

患者さまの要望に応えないことも、医療の1つの形

私には、ずっと大切にしている信念があります。それは、「患者さまご自身が持っている力をできる限り伸ばしていくべきだ」ということ。たとえば歩行であっても、いつも看護師が手を取るのではなく、自力で歩けるのであれば、そのチャレンジをするべきだと思うのです。なぜなら、患者さまには帰る家があり、看護師がいない生活がある。患者さまのことを考えると、看護師だけでは対応できないこともあります。もちろん、安全に透析を行うことは私たちにしかできないことです。ですがその先にある人生を考えると、患者さまお一人おひとりの生活環境を把握した上で対応方法を考えていく必要があるのではないのでしょうか。

1通の手紙から、思いやりを教わった



以前、善仁会グループで発行している患者さま向けの冊子に『思いやりの行動』の推進について寄稿する機会がありました。そのとき私は「自分は日々思いやりを持って接することができているのだろうか」という正直な気持ちをつづりました。自分の信念が揺らいでいたわけではないのですが、一抹の不安を抱いていたのです。

冊子が発行された後、ある患者さまから手紙をいただきました。そこには私の文章に対する感想が寄せられていて、その中で目に留まったのが「思いやりとは、思いと思いのやり取りだ」という一文。ハッとしました。自分の心のうちをさらけ出してはじめて、思いやりが生まれ得るということを知らされたのです。自分の思いを打ち明け、相手の思いを受け止め、そこから起こすべき行動を決める。その一連のやり取りこそが思いやりなのだと思いき、以降は自信を持って信念を伝えられるようになりましたし、まわりの意見にもより耳を傾けられるようになりました。あの手紙は、今でも私の支えです。



真摯に謙虚に

日々看護と
向き合っていきたい。

竹林志保